

# 「生きる」を支えた 家族の愛と栄養の力。

前号では、血液系の遺伝性疾患で生まれた子どもが、母体からの栄養補給で状態の改善をめざしたケースを紹介しました。しかし病気はその後も一進一退を続け、子どもと家族は不安と闘いながら成長していきます。果たしてどうなったか、続きをみていきましょう。



生後2か月で「重症先天性好中球減少症」と診断された子どもは、母親の母乳からの栄養補給を受けながら、成長していきましました。離乳後は、ポタラポのグリーンやにんじん、ミネラルを食べ物に混ぜて1日何回か飲ませるようにしました。

しかしその間も、ひきつけや発熱、下痢、口内炎などさまざまな症状を経験します。病院から処方されたバクタ（抗生物質）を予防薬として服用し、発熱があると病院で血液検査を受けて、CRP値（炎症反応）が起きているときに血液中で上昇

するタンパク質の値が高いと即入院（1回6日間程度）となるなど、4年間にわたり入院を余儀なくされます。この頃から父親は、4年間の治療で病状が大きく好転しないこともあって一旦、予防薬の服用を中止し、栄養補給だけで状態の改善をめざします。ポタラポの製品や栄養の力をひたすら信じ、家族全員で糖質を控えるなど甘いものは極力とらないようにしました。

それからは、発熱症状こそ時どき現われますが、不思議なことに血液検査を行うたびに、CRP値があまり上がらないようになります。そして薬をやめて1年6か月、家族の協力もあって、子どもは一度も入院せずにごすことができました。その結果に、家族は食事や栄養の力が働いたと考え、決して「偶然ではない」と思えるようになったといえます。

しかし子どもが成長し、学校生活を経験しはじめた頃から、父親は今後のことを考えて「骨髓移植」を検討します。この間、骨髓移植をするために家族全員が遺伝子型の検査を受けました。結果、すぐ上の子どもと6/6の一致を確認。主治医から「骨髓移植をすれば普通の生活ができる可能性が高い」と説明を受け、8歳のときに移植手術を受けるのです。

骨髓移植後の体調や経過は思った以上に順調で、免疫拒絶など予想された副作用もほとんど見られません。毎月の通院と投薬は1年4か月で終了。現在、経過観察のため毎年1回の通院は欠かせませんが、学校や家での生活は不自由なく過ご

しているそうです。子どもは今、16歳になっています。

父親によれば「物心ついた時からポタラポの製品を飲ませていたこともあって、今でも毎日、グリーン、キャロット、オメガミネラルは欠かしたことがない」とのこと。病院との関係は今後も続きますが、骨髓移植が大きな副作用もなくうまく行ったのは、食事や栄養補給が大きな力になったのではないでしょう。栄養療法による免疫力アップは、病気の治療能力や薬の効果を高めます。今回のケースを知って、皆さんもぜひそのことを再認識し、普段からの栄養補給につとめてください。



あきやましんいちろう  
秋山 真一郎

医師・医学博士、カナダマギル大学臨床腫瘍学客員教授。NPO法人がんコントロール協会理事。がん免疫治療と植物栄養素を中心とした免疫栄養療法など、副作用のない多角的療法で成果を上げている。